

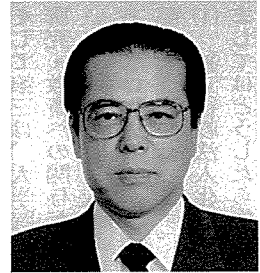


編集発行者
千葉大学医学部
るの は な 同窓会報編集部
〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
るの は な 同窓会
電話 (043) 202-3750
FAX (043) 202-3753
e-mail:idosokai@med.m.chiba-u.ac.jp

千葉大学医学部同窓会報 第127号

題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元るの は な 同窓会長)

附属病院長に伊藤晴夫教授(昭39)



平成13年3月31日をもち、任期満了となった山浦晶前附属病院長の後任として、伊藤晴夫遺伝子機能病態学(旧泌尿器科学)教授が新附属病院長に就任された。任期は本年4月1日より平成15年3月31日である。(挨拶文は2面に掲載)

るの は な 同窓会総会のお知らせ

今年度のるの は な 同窓会総会を左記により開催致します。同封の葉書にて出欠の返事をお送りください(6月15日必着)。

一、日時

平成13年6月23日(出)

午後3時より

一、場所

ペリエホール

一、総会次第

会長挨拶

(1)会務報告

(2)議案

1 平成12年度決算承認

の件

(イ)決算報告

(ロ)監査報告

2 平成13年度事業計画

の件

3 平成13年度予算(案)

4 名譽会員の推薦につ

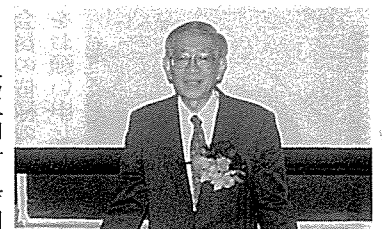
いて

5 役員の交代について

6 千葉大学同窓会(仮

最終講義

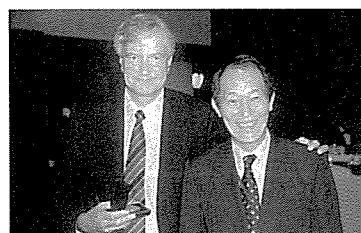
平成13年3月で停年により千葉大学医学部の教壇を去られる増田善昭教授(内科学第三)の最終講義が2月14日午後2時半より、千葉大学医学部附属病院第一講堂において行なわれた。福田康一郎医学部長の挨拶の後、増田教授より「虚血性心疾患の画像診断」について最終講義が行なわれた。講義終了後学生代表謝辞、花束贈呈が行なわれ、斎藤俊弘助教授より閉会の辞が述べられた。引き続き記念祝賀会が附属病院第三講堂で行なわれ、当日の行事は滞りなく終了した。



増田善昭教授

第三内科 吉田勝哉

平成13年2月16日、千葉大学医学部附属病院第一講堂にて、第一外科中島伸之教授の最終講義が、行われた。ニューヨーク留学のための出航時の見送りの珍しいスライドに始まり、ニューヨーク、大阪、そして、千



中島伸之教授

第一外科 増田政久

葉と三つの時代を順に追いつながら、先生の考え方、ご活躍された様子を講義され、興味深く拝聴させて頂いた。約1時間半の講義には、多数の学生、病院関係者そして同門の諸先生方が出席され、大盛況の内に終了した。

第6回のるの は な 同窓会賞受賞者決定

功労賞

アテマール・ヤマナカ (UNICAMP教授、1982

UNICAMP医学部卒)

「内視鏡診断を通した千

葉大学とUNICAMPの

国際交流に貢献」

行天良雄(専24)

「医療社会学」

富田 裕(横浜市民協会の

理事、昭30)

「地域医療の向上」

学術賞

清水栄司(学而会木村病院

精神科、平2)

「NMDA受容体遺伝子

改変による学習・記憶メ

カニズムの解明」

白澤卓二(都老人研、分子

遺伝室長、昭57)

「アルツハイマー病と蛋

白質翻訳後修飾」

高野博之(三内、医員、昭62)

「心肥大および心不全の

病態形成におけるMAPKの

役割」

寺田修久(耳鼻咽喉科、講

師、秋大昭57)

「鼻粘膜過敏性の病態解

明と環境汚染が上気道粘

膜に与える影響に関する

分子生物学的研究」

中島裕史(二内、助手、宮

崎医大昭63)

「肥満細胞特異的Stat3

アイソフォームの発現制

御機構とその機能解析」

西谷 慶(一外、研究生、

平4)

「外科侵襲下における代

謝系及び免疫系の変化」

野呂瀬一美(寄生虫学、助

手、信大昭52)

「寄生体由来HSP70に

よる自己免疫疾患誘導機

序の解析」

日和佐隆樹(生化学第一、

紙面紹介

就任の挨拶 2面・4面
るの は な 我が恩師(2)
同窓会員著書の紹介 3面
クラス会 5面・6面
各地るの は な 会だより 7面・8面
8面・9面
附属病院ニュース 9面
人事異動 10面・11面

FAX: 043-202-3753

助教授、東大理昭50)

「システイン・プロテアー

ゼのがん抑制効果に関す

る研究」

村田泰章(整外、院生、平

5)(グループ代表)

「仙腸関節の神経支配に

ついて」

idosokai@med.m.chiba-u.ac.jp

chiba-u.ac.jp

電子メールアドレス: idoso2@med.m.

idosokai@med.m.chiba-u.ac.jp

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

FAX: 043-202-3753

附属病院長に就任して

伊藤晴夫(昭39)

平成13年4月1日より、山浦晶病院長の後任を拝命いたしました。もとより微力ではありますが、抱負の一端を述べさせていただきます。

医療制度の激変しつつある現在、附属病院も各種の改革を迫られております。われわれはこの激動の時代に入ってしまったのかそれとも危機をチャンスとして捉え一気上昇してゆけるかの、分岐点に立っていると思っております。この重大な時期に病院の機構改革を進め、より良い附属病院としてゆき、ひいてはより良い千葉大学にして行かなければならないと思っております。

まず、附属病院の基本的な機能は何かということですが、その第一は先端医療を実施する病院であることだと思っております。このために附属病院は特定機能病院となっているわけです。もう一つは医師養成機関としての医学部附属病院であり、研修指定病院であることだと思っております。勿論、これらの根底には高度の医療水準

を保ち、患者本位の診療を行うという基本的な心構えが必要なのは当然です。

さて、これらの附属病院の基本的な機能を充実させるために、現在最も重要な問題は次の三つであると考えます。第一に独立行政法人化問題です。これには経営指標の改善も重要ですが、それ以上に経営の改善に役立つのは病床あるいは外来スペースの有効利用、診療科の再編を含めた機構改革であると思っております。第二には、平成16年からの卒後臨床研修の必修化への対応です。必修化に伴い、現在約140人いる研修医の数が保有ベッド数の関連から約40人に削減されます。この医師不足や養成すべき後輩たちの不足が問題となります。そして第三は、大学院での研究・教育への関与だと思っております。この他にも、沢山あるとは思いますが紙面の都合で省略いたします。

だと思っております。千葉大学学生の人的優秀性、地域的有利性(千葉県は日本有数の人口を抱え、首都圏に位置する)を踏まえ旧帝大を越えるように改革を進めてゆべくと思っております。独法化は国からの補助あるいは保護がなくなると云う短所はあります。しかし、経営努力あるいはライセンスの取得などにより成果が上がれば、職員数を増やすとか、新しい機器を購入するとか、更には病床の増築などにより附属病院を発展させられる可能性が大きくなるわけですから、独法化をチャンスと捉えていくためには保険診療における査定率の改善、病床稼働率の向上などだけでは不十分であり、根本的には附属病院の制度改革であると思っております。具体的には、①外来スペースの機能的利用、②病床の有効利用、さらには③臨床科の再編などが重要であると思っております。多少の痛みを伴うことと思いますが、全科で公開性と公平性を確保しながら徐々に変えてゆけば不可能ではないと思っております。

(1) 独立行政法人化につきましてはどうしたら生き残れるかではなく、これを発展のチャンスとして捉え各種の改革を行ってゆくべきだと思っております。これはその昔、インターン制のあったころ、多くの同級生が外の病院でインターンをしてもまた附属病院に戻ってきた人が多かったことから分かると思っております。そのため具体的には、先進医療の実施、大学院教育の充実などが考えられます。また、研修指定病院を含む関連病院との連携が特に重要だと思っております。そのためには、現在各診療科で行っている関連病院との連携を中央管理にして附属病院が中心となっていくようにする時期が来ているのではないのでしょうか。この点に關しても、各診療科は長い歴史を有していますので、良く各診療科の実情を考慮して、徐々に行うべきことは云うまでもありません。

(2) 臨床研修の必修化につきまして重要なことは他の病院で研修した後輩たちが戻って来なくなるような魅力ある附属病院にすることだと思っております。これはその昔、インターン制のあったころ、多くの同級生が外の病院でインターンをしてもまた附属病院に戻ってきた人が多かったことから分かると思っております。そのため具体的には、先進医療の実施、大学院教育の充実などが考えられます。また、研修指定病院を含む関連病院との連携が特に重要だと思っております。そのためには、現在各診療科で行っている関連病院との連携を中央管理にして附属病院が中心となっていくようにする時期が来ているのではないのでしょうか。この点に關しても、各診療科は長い歴史を有していますので、良く各診療科の実情を考慮して、徐々に行うべきことは云うまでもありません。

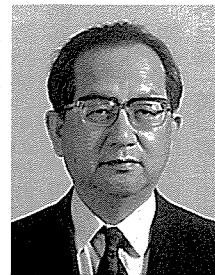
(3) 大学院教育への関与に關しては、附属病院を薬学部および看護学部と共有するくらいの発想の下に研修生を受け入れ、診療・教育の活性化を計るべきだと思います。また、大学院での基礎的研究成果の臨床応用をスムーズに行えるように、法的整備や施設整備に努力することも必須です。これらの多くは、大学院化された医学部の主導のもとに行われるべきことであります。

そこで、附属病院の立場として重要なのは、①附属病院経営の改善で、先端的医療の費用を確保する、ないしはさらに利益があげられればこれを基礎研究にまわす、②基礎と臨床の密接な連携の強化をめざす、③大学院生の定員の確保のための後押しを積極的におこなう、ことであると思っております。

以上、附属病院の今後のあり方について意見を述べさせていただきます。私は現在、対外的には「大学評価・学位授与機構」の研究評価員、「社団法人日本不妊学会の理事長」、「日本アンドロロジー学会の理事長」などを務めさせて頂いておりますので、少しはものごとを広くみる事が出来るようになってきているのではないかと思います。上記の実現に向けて、私なりに最善を尽くして努力してゆきたいと思っております。千葉大学医学部附属病院および同窓会員の皆様のご指導ご支援をお願い申し上げます。

東京女子医科大学付属病院長就任挨拶

林 直 諒(昭38)



平成13年4月1日付で東京女子医科大学付属病院院長を拝命致しました。

東京女子医科大学の歴史は古く、1900年(明治33年)、吉岡弥生先生により東京女医学校として開設されました。東京女子医科大学となつたのは1947年(昭和22年)です。昨年12月5日、100周年記念祝賀会が行われました。病院としては、1904年東京至誠医院として発足発展し、日本心臓血管研究所(1955年設立)、消化器病・早期癌センター(1965年)、脳神経センター(1971年)の3つを含む9センターと13の診療科があります。病床数は1423、職員数は医師900名強、看護婦1300、その他で総計3550名で、外来患者数4200・4500名/日です。心臓と脾・腎の脳死後移植施設となつております。以上のようなわけで、平穏な日々が送れるとは思いませんが、大学上

層部が今回から副院長を3・4名に増員するというところで、そのうちには同門の高崎健教授(消化器病センター外科、昭42)にも加わっていたことにしていますので心強く思っています。さらに理事会には、浜野恭一先生が専務理事(昭33)として活躍されており、今までも何かと御配慮、御指導いただき大変心強く思っております。

私は平成5年4月、国立横浜病院から消化器内科教授に転任致しましたが、横浜病院以前は10年間消化器病センターで、当時小幡内科教授(現名誉教授)のご指導を受け、現在も外科の羽生名誉教授、浜野常任理事を始め多くの同門の先生方には何かとご苦勞をおかけ致しております。今後、訴訟、リスクマネージメント、感染対策、構造改革、収支改善、危機管理など、素人にとっては勉強課題は盛りだくさんあるものだと云うのが現在の心境であります。皆様方には今後とも御指導、御鞭撻のほどお願い申し上げます。

るの は なの 我が 恩師 (2)

赤松 茂 (生化学)



広島県出身、一高、東大卒、柿内三郎に師事。教授在職期間大正11年―昭和35年。中学生のとき広島に秀才がいると全国的評判があった、と聞いたことがある。教授在職期間の最長記録をもつ。教授のとき、学生の方が年上であったこともあった。講義は書けるように口述され、それから解説された。いまでもそのノートをみると大変になった。詳しい教科書を出版された。戦後でまだアイソトープが実験に使われてなかった、当時の生(医)化学は血糖や尿蛋白の測定を素習でやった。アミノ酸のクロマトグラフ、糖代謝の結果ATPの生成を説明されたのが印象に残っている。生化学の講義だけが当時術語が英語であった。トラウベンツッカーでなくグルコースであった。大学院の選択科目で小人数での抄読会での外国語

永野 俊雄 (昭30)

の読解力に驚かされた。あまりに頭が切れすぎて弟子がついてゆけないと聞いたことがある。畏敬から学生は先生に話したことは少ない。門下に降矢震、麻生芳郎がいた。

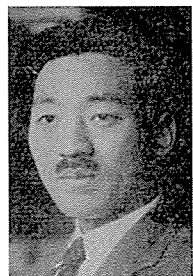
小林 龍男 (薬理学)



東京出身、暁星中学、山形高、千葉医大卒。教授在職期間昭和21年―昭和45年。江戸っ子のお人良しの先生で、怒ったのを経験した学生はいない。専門は神経薬理で、トランキライザーの研究を行う。講義は淡々と聴いていて気持ち良かったがあまり印象に残らなかった。個人的に話すと、反骨批判され、またフランス語関係で、フランス留学の世話になった者も多い。ふすま会(山形高の同窓会)、るの は なの 同窓会の世話を長くなされた。大学紛争中に医学部長となられて、苦勞が多くお気の毒であった。

門下に萩原弥四郎、小倉保己、村山智、久我哲郎がいた。

谷川 久治 (衛生学)



四高、千葉医大卒、教授在職期間昭和20年―37年。筆者が医学部に入ってからはじめての講義が谷川先生であった。黒板に書いた文字を自分で消さず、サインをだすと助手が消したことにショックを受けた。第一回千葉医大卒のはじめての教授で、同窓会では大変な期待をされたに聞いている。寄生虫の感染予防のため、谷川式便所は有名であった。後に学部長、学長をされ、松村・谷川衛生国を築いた。門下に田波潤一郎がいた。

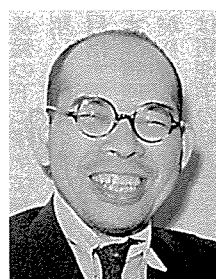
川喜田 愛郎 (微生物学)



一高、東大卒。教授在職期間昭和24年―43年。当時東大伝研から、教授になら

れたばかりで厳密な講義が特に印象的であった。交通事情から時々研究室にとまられた。第1回の講義に、何から話をするか相当考えたといわれ、アイスクリーム中の雑菌と大腸菌の話がされた。まさに細菌学の基本中の基本であった。またコッホの結核菌の発見と伝染病と病原細菌のはなし、パスツールの発酵の話など今でも、目に浮かぶ。講義は正確を期され、要点はゆつくり話され、隙のない講義でそれが強い印象を与えた。教科書に書いてない講義は魅力いっぱいであった。趣味は野球と柔道であった。キリスト教徒で課外活動で聖書研究会を熱心に行った。専門はウイルス学で実験者でなく、批評家といわれたが、非凡な文筆家であった。教室には桑田次男、波田野基一、寺島東洋三がいた。有名な名著書がたくさんある。学長になられたが、大学紛争で自衛隊の入学をめぐって紛糾し辞任された。

滝沢 延次郎 (病理学)



東京出身、一高、東大卒。緒方知三郎門下。教授在職期間昭和17年―43年。

まず講義の声の大きいこと、スピードの早さに度肝を抜かれた。病理学総論、実習、解剖術式、寄生虫の講義をされた。病理学の種々の概念を徹底的に教えられた。ウイルヒョウの病理と緒方・三田村の教科書を使った。東京の自宅に帰られるのがいつも終電直前であった。試験が一对一の口頭試験で簡潔正確に答えられないうちで大声でお説教の方が長く、夜中まで試験が続いた。口頭試験が学生への個人教育であるとの考えから時間無制限で行われ、学生はその対策のみに走った。実に豪快な教授であった。当時癌か良性腫瘍かの判断は滝沢教授が癌といえは癌であった。夜は教室員への話が階を越えて聞こえた。学生のクラブに来られると、講義とはまったく違った実に愉快なお話をされた。帰りの電車で時々一緒に話したとき、学問的なお話をうかがうことが出来た。学会では緒方一門であることと大声で質問したと聞いている。教室に嶋田博、井出源四郎がいた。

石橋 豊彦 (病理学)



千葉医大卒、教授在任期間昭和24年―昭和30年。滝沢教授の動にたいして、いつも静であった。講義はドイツ語が多くて、理解するのに苦労した。やや難聴であった。免疫病理が専門で、教室でウサギのアナフラキシーショックのデモをされた。教授室で脳出血のため若くして急逝された。試験は滝沢教授に反して全員合格であった。

加賀 谷勇之助 (法医学)



秋田県出身、一高、東大卒。教授在任期間昭和2年―昭和35年。短軀で学生に最も人気があった。専門の法医学(血清学)のみならず、虚子門下の俳句の大家であって、凡秋と号す。その他の芸を極められ、良き時代の教授であった。昼食を葛城の加

賀谷御殿までとりにゆかせ、冷たいご飯は食べたことがないと噂があった。当時の汽車の三等には乗らなかった。講義で縊死と絞死の違いをはじめ教えてくれた。多くの学生は法医学とはなにかを知らなかった。殺人事件の解剖を見学させてくれた。当然千葉医大の俳句の会の指導をされた結果、千葉にはたくさんの方々がいる。病院正門右側の窪地の凡秋谷はこれに由来する。門下に宮内義之介、木村康がいた。

第95回
医師国家試験成績

試験日 平成13年3月17日(出)

合格発表 平成13年4月26日(休)

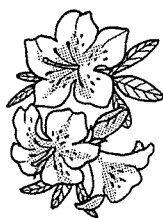
受験者 109

合格者 104 合格率 95.4%

参考 国立

合格者 4420 合格率 92.4%

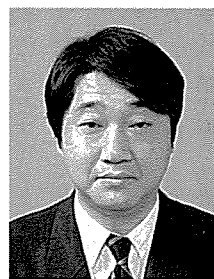
全国 合格者 8374 合格率 90.4%



教授就任挨拶

東京女子医科大学 第二病理学講座

小田 秀明 (昭57)



このたび、平成十三年一月一日付けで、東京女子医科大学・主任教授を拝命し、病理学第二講座を担当させていただきますことになりました。創立百周年を迎えた伝統ある東京女子医科大学に、二十一世紀の節目に就任しますことは私にとり大きな喜びですが、同時にその責任の重さを痛感しております。

私は昭和五十七年に千葉大学を卒業し、卒業後小児科(中島博徳教授)において三年間研修し、その後病理の世界に入りました。小児科学教室では血液腫瘍グループ(佐藤武幸現助教授)に属し小児の臨床と同時に研究面でも指導を受け、その後の医師としての基礎を学ばせていただきました。病理学は神奈川こども医療センターで病理医としての

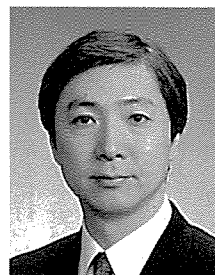
生活を始め、引き続き東京大学病理学教室にて研修・研究を行いました。病理を始めてから現在まで、自分の目で見る多彩な疾患の世界や疾患における人体の変化の保守性に驚きつつ仕事をしております。研究面では、腫瘍における遺伝子変異の検索、遺伝子操作マウスを用いた腫瘍発生のメカニズムの研究を行い、平成九年より一年半、Harvard Medical School病理学教室に留学しPeter, M.H. M.D.教授の下で細胞生物学的手法を用いたユビキチン化によるタンパク分解の研究を行ってきました。

においても積極的に進んだ方法論を取り入れ研究を展開すべきであると考えます。病理学はしっかりと形勢的基盤の上に成り立っている学問であり、その基盤の上に進んだ学問分野を取り入れて展開していけば、病理学は夢のある学問であると考えます。ただ、多くの病理学教室では進んだ方法論を取り入れる環境作り、研究室の整備が十分であったことは確かです。私はこの面にも力を注いで行く所存です。また、学内外の基礎および臨床各科の先生方とも積極的に共同研究を行いたいと考えています。

基盤の下に様々な方法論を用いて病気の本体の解明を目指す学問であると考えます。病理学の魅力はその広がりにあると言えます。私は病理学の魅力を学生に伝え、教室員と共に生き生きとした教室を作り、病理学の発展のために努力していきたいと考えております。今後とも、あのはな同窓会の諸先生方のご指導・ご支援の程よろしく願っています。

東京女子医科大学耳鼻咽喉科学講座

吉原 俊雄 (昭53)



このたび、平成十三年四月一日付けで、東京女子医科大学耳鼻咽喉科学講座主任教授を拝命いたしました。

これまでご指導いただきました諸先生方に心より感謝申し上げます。東京女子医科大学耳鼻咽喉科の沿革について述べますと、その母胎は大正四年菅沼志津子により附属医院耳鼻科診察室の開設に始まり、昭和十七年佐藤イコ初代教授から私の前任の石井哲夫教授まで女子医大、九大、東大出身の教授五人が歴任され、私で六代目となります。その間の各教授の専門は様々な感染症、頭頸部腫瘍、めまい・平衡、中耳手術と

多岐にわたり、皆耳鼻咽喉科学会において高い評価を得てまいりました。このような伝統と輝かしい業績をもった教室を引き継がせていただきますことは極めて光栄なことと同時に責任の重さに身の引き締まる思いであります。

私は昭和五十三年に千葉大学を卒業後、金子敏郎教授(現名誉教授)の主幹さに移りました耳鼻咽喉科学教室に入局し頭頸部外科学を学び、大学院時代に永野俊雄先生(第二解剖学教室名誉教授)、神田敬先生(耳鼻科)のもとで唾液腺を中心に電子顕微鏡の基礎と形態学の楽しさに触れることができましたことは臨床医にとりまして極めて貴重な経験でした。また昭和六十年から六十二年に米国ベラー医科大学耳鼻咽喉科において内耳輸送上皮の機能と形態について研究を行ってまいりましたが、留学の際他の病態解明と治療法について取り組んでおります。また、耳鼻咽喉科は感覚器を多く含む科であり、とくに内耳の聴覚、平衡覚の障害は円滑な日常生活に支障を来します。基礎的研究は内耳のリンパを調節する輸送上皮について、これまでの電子顕微鏡、免疫組織化学的研究の成果に加え、さらに分子生物学的手法を用いた研究を教室として進めて行きたいと考えております。東京女子医科大学では、テュートリアルを中心に医学教育改革が比較的早い時期からスタートしています。女子医大生を対象とする卒前教育と全国の様々な大学から男性も交え行われる卒後教育は、互いに刺激し合い活気あふれる病院の原動力となっております。私共の教室も耳鼻咽喉科学の教育を通して臨床、研究の情熱が学生に伝わるよう努力し、ひいては教室員自身が診療、研究、教育能力の向上に努め、より優れた耳鼻咽喉科医となるような環境をつくりたいと考えております。あのはな同窓会の諸先生方には今後益々のご指導・鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

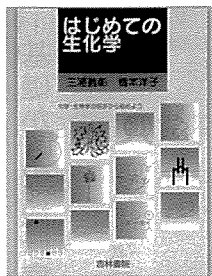
唾液腺腫瘍の病理の他、摂食障害に起因する唾液腺症の病態解明と治療法について取り組んでおります。また、耳鼻咽喉科は感覚器を多く含む科であり、とくに内耳の聴覚、平衡覚の障害は円滑な日常生活に支障を来します。基礎的研究は内耳のリンパを調節する輸送上皮について、これまでの電子顕微鏡、免疫組織化学的研究の成果に加え、さらに分子生物学的手法を用いた研究を教室として進めて行きたいと考えております。東京女子医科大学では、テュートリアルを中心に医学教育改革が比較的早い時期からスタートしています。女子医大生を対象とする卒前教育と全国の様々な大学から男性も交え行われる卒後教育は、互いに刺激し合い活気あふれる病院の原動力となっております。私共の教室も耳鼻咽喉科学の教育を通して臨床、研究の情熱が学生に伝わるよう努力し、ひいては教室員自身が診療、研究、教育能力の向上に努め、より優れた耳鼻咽喉科医となるような環境をつくりたいと考えております。あのはな同窓会の諸先生方には今後益々のご指導・鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

同窓会 員 著 書 の 紹 介

三浦義彰・橋本洋子 著
「はじめての生化学」

杏林書院、東京 定価2,000円

鈴木信夫(昭47)



読書は創造の泉ですが、原子・分子の世界から生命の世界を脳裏に構築させる生化学には打って付けの学習法です。しかし、現状では、生化学と名付けられた本ならどれでも読書して良いと医学生に勧めることができません。近年の医学生の学力低下は極めて深刻であり、旧来通りの分厚い教科書類を推薦できないからです。このようなご時世に好都合なものとして、本書は出版されました。「医学部には高校で化学や生物学を履修して来ない医学生もいるので、その人達にもわかるような生化学の教科書の執筆をお願いします。」との依頼を出版社から受けて、三浦義彰先生(旧生化学第一講座・名誉教授)が企画執筆されたこのこと

本書では、まず第一章で化学へのご招待と銘を打ち、必要最小限度の化学用語の説明をしてあります。簡明な図もあり、大変理解しやすい導入です。では、第二章からは、通常の教科書のように、生体分子の構造説明へと話が進むかと思いきや、そうではありません。体の生化学へと導かれるのです。「生化学は生理学から派生した基本学問である」と理解するには、適切な構成です。従って、生化学イコール分子遺伝学であるいは遺伝子工学などと誤解している方々には是非読んでいただきたい本です。第三章以下では、臓器の生化学や種々の疾病についても話は及んでおり、実地医療やPublic Medical分野の方々にも役立つ本でしょう。

さて、本書の最大の特徴は何かと申しますと、おそらく、「台所の生化学」を訴える先生ならではの工夫があるという点でしょう。特に、栄養学的説明の少ない従来の生化学教科書とは

違い、「ヒトに必要な生化学」と題した章が設けられている点です。実際、その

伊藤晴夫編

「尿路結石症外来」

メジカルビュー社 定価950円

赤倉功一郎(昭59)



尿路結石症は頻度の高い疾患であり、近年生活様式の変化とともに増加しています。同窓会諸先生におかれましては、患者を診察されたご経験のみならずご自身が患者として痛みに苦しまれた方もおられるかと思ひます。できてしまった結石の治療については、ESWL(体外衝撃波碎石術)や内視鏡手術の登場普及により開腹手術はほとんど行なわれなくなり大きな進歩がみられました。しかしながら、疾患としての尿路結石症の治療すなわち再発予防についてはむしろ軽視される風潮があります。尿路結石は非常に再発しやすく、病因や再発予防は患者個人にとってもまた医療経済学の観点からも重要な問題で

中身は、と申しますと…否、あとは読んでからのお楽しみとしましょう。

本書は、尿路結石患者を診察する際に必要な知識技術をすべて網羅しており、戦内容は具体的であるため、明日からの臨床にすぐに役立つものとなっています。尿路結石症研究において臨床的にも基礎的にも日本をリードしてきた千葉大学医学部泌尿器科学教室伊藤晴夫教授の編集のもとに、千葉大学および帝京大学市原病院泌尿器科の教員が分担執筆しているため、基礎研究から臨床実地まで一貫した視点姿勢でかかれており重複や矛盾がないため、非常に読みやすくなっています。また、掲載されているレントゲン写真はもちろんのこと査電子顕微鏡写真までがすべてオリジナルのものであります。さらに、本書中には食物中のカルシウム不足や腸管内のシュウ酸分解菌の欠如が腸管内シュウ酸の増加さらに高シュウ酸尿をきたして結石形成の危険因子となるという伊藤教授独自の新しい考えも紹介されています。この説はその後欧米でも支持され通説となっており、現在では結石患者にはむしろ適度なカルシウム摂取を勧めるのが常識となりました。生活習慣病の一つとも考

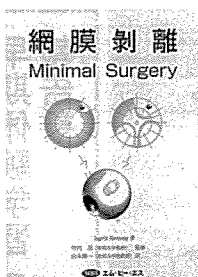
Ingrid Kreissing 著

「網膜剥離Minimal Surgery」

竹内 忍 監修 山本修一 訳

エム・ピー・エス 定価6,000円

安達恵美子(昭37)



本書はチュービンゲン大学のKreissig教授が、1999年Thiemeより発刊した本の日本語訳である。彼女の30年以上の網膜剥離手術への貢献は、国際的にも高く評価されている。その永年の経験に基づいて、診断法、手術法をQ&A方式にして、カラーの模式図入りで八項目に分け簡明に説明し、それぞれ文献が添っている。中でも最も印象深い記述は「網膜剥離の予

えられ近年増加している尿路結石症について成因から診断治療のポイントまでわかりやすく解説されており、泌尿器科医はもとより結石患者を診る機会のある内科、外科、整形外科などの各科医師、さらに看護婦、放射線技師、検査技師などの医療従事者にも是非一読をお勧めいたします。

「がん告知」(患者の尊厳と医師の義務)
編者 竜 崇正、寺本龍生

本書は「守るべきは患者の人權である」との立場に立ってどのようにがんの告知をすすめるべきか、種々の

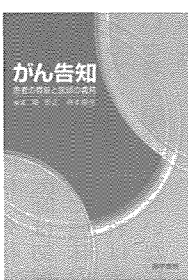
1999年11月、東邦大学佐倉病院竹内忍教授が主催された第38回日本網膜硝子体学会総会に彼女を招待されたとき本書の訳が意図され、いち早く実行された。竹内教授監修のもと、山本修一助教授(千大・眼・昭58)が訳したものである。御兩人とも第一線の網膜剥離の術者であるから、その訳はじつに読みやすく自分のものになっており、訳本とは思えない。

活字も大きくQ&A方式で、ポケット判であるので、研修医にとっても便利である。しかし、本音は、これくらいのもものは原語で読んで欲しい。(Kreissig教授はドイツ人だが英語で書かれているのだから)

医学書院 定価3,500円

長山忠雄(昭38)

の立場で活躍している昭和43年(1968)卒業者を中心とした33名の方々が日頃から語り合っている事をガイドラインとして纏めたものである。昭和43年当時の医療は、所謂パターンリズムのもとに行われており、がんの告知はほとんど実施されていなく、また医療に対す



る倫理的配慮の関心は低く、現在の医療では不可欠であるインフォームドコンセントの概念すら存在していない状態であった。従って、本書に記されている内容はその後の社会・医療環境の変化に対応してそれぞれの著者の方々がそれぞれの立場で培ってきた豊富な臨床経験から導き出されたものである。本書の内容は、はじめに総論として、医師、法律家、看護婦とコメディカルなどの立場からがん告知のガイドラインが述べられ、これにつづいて22のさまざまな事例がそれぞれに報告者の告知にたいする理念とコメント・反省点とともに記載されている。さらに、がん告知困難例にどのような対処するかがん告知

の実践に関する座談会とさまざまなアプローチについても書かれており、実際の臨床の場で非常に参考になるものである。

ひとはそれぞれに個性があり、価値観もライフスタイルも異なっており一人として同じひとは存在しない。この観点からすれば、がん告知に共通する完全なマニュアルはないといって良いであろう。最終的にがんの告知は医師個人の価値観・人間観と人生・臨床経験に基づきなされるものである。この点、医師に課せられている責任は重大であり、常に自分自身の知的・精神的研鑽が要求されているのである。がん医療に携わるすべての医師が本書を一読されることをお勧めしたい。

近年本邦における前立腺癌の増加は著しく、近い将来の増加率は全悪性腫瘍の中で一位であると予想されている。すなわち、1990年に対する2015年の25年後の予想増加比でみてみると、前立腺癌が3.9倍と最も高い。これは人口の高齢化が進んでいる以外に食事の欧米化などの環境要因の変化も関係していると思われる。米国においては前立腺癌は男性の悪性腫瘍のうちで最も頻度が高く、死因では第2位の癌である。日本においても10年ないし20年後には現在の米国に近い状況になることも予想される。

前立腺癌に関する研究が盛んであることはその論文数が莫大であることから推測できる。これは前立腺癌はその頻度が高く、致命的な病気であるので当然である。このような状況の下で前立腺癌を専門としていない泌尿器科医はもとより前立腺癌の患者に接する機会が多い内科、外科、放射線科などの医師にとって前立腺癌に精通することは大変である。また、雑誌などで特集号を組むこともあるが、その一つ一つの総説は優れていても、統一性においては問題が無いわけでは無い。このような時にメ

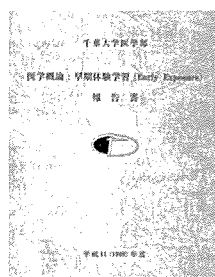
ジカルビュー社より単行書執筆の依頼を受けた。幸い私どもの教室は前立腺癌の基礎と臨床の双方に全力を傾けているので教室員の総力を尽くして本書を書かせて頂いたわけである。意図したのはタイトルからも分かるようにこの一冊で基礎から実地診療まで前立腺癌のすべてが分かるようにしたことである。とくに最新の情報を取り入れるように努力した。

内容はI、基礎編は(1)疫学、(2)前立腺と前立腺癌の基礎、(3)前立腺癌の分子生物学からなる。II、臨床・実地編は(1)前立腺癌の診断、(2)前立腺癌の治療、(3)前立腺癌治療に必要な前立腺肥大症の知識を含む。最後のIII、実地症例への対応編は代表的な症例を提示しどのように診療を進めてゆくべきかについて述べた。特に、III、はこの単行書のなかでも最も工夫した章である。ここでは「前立腺肥大症で治療中のPSAが少し高い患者」、「前立腺肥大症の診断の下にアンチアンドロゲン剤で治療中に直腸診で腫瘍を触れる患者」、「腰痛を主訴に来院した前立腺癌患者」、「精液に血液が混じる症例」、「前立腺癌の手術適応があるが性生活を続けた

い患者」、「高齢の限局性前立腺癌患者」、「若い進行性前立腺癌の患者」、「進行性前立腺癌の内分泌療法中に治療を中断して病状悪化のため再入院した患者」、「放射線療法からの進行例」など多くの代表的な例について解説を加えた。医師でない医療関係者でないところの多くの患者さんがこの本

を購入したが、その方たちはこの章に一番興味を持ったとのことであった。以上、この単行書は泌尿器科あるいは内科、外科、放射線科などの医師は勿論のこと、この疾患に興味のある方々の参考となれば幸いです。と考へ紹介させていただきました。

千葉大学医学部 平成11(1999)年度医学概論： 早期体験学習(early exposure) 報告書



平成11年度の千葉大学医学部1年次学生の「医学概論：早期体験学習報告書」が出来ました。お忙しい中、医学概論で講義を担当して頂いた講師の先生、また早期体験学習の見学実習を引き受けて頂いた各施設の御協力に深く感謝申し上げます。

医療を取り巻く環境は年々厳しくなり、健康保険の財政的破綻、医師過剰、相次ぐ医療ミス等問題は山積みしている状態です。その一

で学ばさうなっています。本年度も昨年と同様に「医学概論」の講義と「学内外施設での見学実習」に関する彼らのレポートが掲載されています。すべてのレポートに掲載する余裕がありませんので、学生全員のものそれぞれ一編以上選択し掲載しています。私もすべてのレポートを読みましたが、若者らしい瑞々しい感性で医療に関する様々な問題について感想を述べているレポートもありました。この初心を忘れずに勉学そして人格形成のために充実した6年間を過ごし、良き医師、医学研究者となってもらいたいと思います。

方で生命科学が画期的な進歩を遂げ、それらを如何に選択し医療に役立てていくかも問われています。従いまして、現在医学生となった学生諸君が卒業後医師になった頃には次々と提起される多くの難問に際えていかななくてはならず、その責任も非常に重く思われます。その様な状況を十分に認識し、この6年間の医学教育の中で彼らがどの様な事を学び、また医師としての人格を形成していくかは非常に重要な課題でもあります。医学教育の中での出発点となる医学概論が彼らの医学を学ぶ上での大きな動機付けとなり、その後の6年間、医学を真摯な態度

たいと考えております。
(前学務委員長 中谷晴昭)



「前立腺癌のすべて」 —基礎から実地診療まで—

泌尿器科 伊藤晴夫(昭39)
メジカルビュー社

には第2刷を、7カ月後には第3刷を発行する運びとなった。

前立腺癌は多くの癌のなかでも非常に特徴的な癌である。高齢者に特に多く、進行が比較的ゆっくりであり、ホルモン療法が有効であることなどである。また、



1999年4月に私どもの教室から上記の単行書を上梓した。幸いに好評で4カ月後

学会だより

環境ホルモンに関する千葉大学

市民講座(第1回)を主催して

環境医学講座環境生命医学(旧解剖学第一講座)

小宮山政敏(東農工大昭57)

平成12年12月20日の午後、当講座の森千里教授ならびに日本公定書協会会長である寺尾允男氏の主催により、環境ホルモンに関する第1回目の市民講座を千葉大学やき会館において開催いたしました。テーマには「我々を取りまく内分泌攪乱化学物質(環境ホルモン)」を掲げ、副題を「天然の食物や飲み物に含まれるホルモン様活性物質の影響とそのリスク判定」として、六名の先生方に講演をしていただきました。参加者は一般市民、企業人、研究者や学生報道関係者(NHK、NHK千葉、千葉テレビ、毎日新聞)の方々を合わせて二百二十名を越え、平日開催のわりには盛況であったと思います。

「環境ホルモン問題の最新事情」と題して、植物エストロゲンを含めた内分泌攪乱物質とその問題点について概説していただきました。

次のセッションでは、ホルモンの仕組みとそれが乱されたときの影響について、女性ホルモンと精巣との関係为例に解剖学第二講座講師の外山芳郎先生に講演していただきました。また、薬学部助教教授の細川正清先生には、肝臓の薬物代謝酵素が環境化学物質によりどのような影響を受けるかについてお話ししていただきました。

第3のセッションは「植物エストロゲンや内分泌攪乱物質のヒトへの影響とその判定法」としてまとめ、初めに当講座の森教授から、これらの問題に対する研究や対策の必要性を中心に千葉大学での今後の研究の方向性についてお話がありました。引き続き当講座の櫻井健一助手の方から、これらの物質の母体から胎児への移行の現状が紹介され、最後に精子形成に対するこれらの物質の影響の判定法に関して、科学技術振興事業団戦

略的基礎研究推進事業(〇四四〇)研究員の足達哲也先生からDNAマイクロアレイを用いた研究の紹介がありました。

講演の後には、生化学第二講座教授の鈴木信夫先生が座長をつとめられて、パネルディスカッション形式で総合討論が行われました。フロアーからも積極的に質問や意見が繰り出され、盛況のうちに第一回目の市民講座が幕を閉じました。

さて、近年の工業化に伴い大量の化学物質が環境中に放出・蓄積されてきました。それらの中にはホルモンの合成や代謝の過程に作用するものや、ごく微量でもホルモン類似の作用を示すものがあり、それらが体内に入ると正常なホルモンの働きを乱してしま

うことが分かってきました。これが内分泌攪乱物質(環境ホルモン)です。その人体への影響は未だ不明瞭ですが、野生動物界では既にその悪影響が表面化してきています。人も動物の一種であることや、人でも確実に多数の化学物質による複合汚染が起こっているというこれまでの研究結果を考えれば、やがて人においても生殖機能や次世代の発育・成長に対する悪影響が表面化するであろうという危惧を抱くのは当然のことです。この

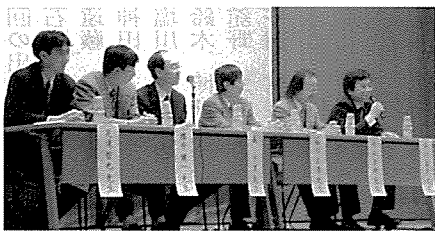
ような状況において、多様な方々の集う中、今回の市民講座を開催できたことの意義は大きいと思われれます。

ひとつには、総合討論における質問や同日実施したアンケートに寄せられた多数の意見から、環境ホルモンを含めた環境問題に対して聴講者の方々が深い関心を持っていること、また改めて問題の重要性を認識していただけたことが明らかにしたことです。

環境ホルモン問題の解決は研究者の間だけで議論していても始まりません。生産者である工業界、消費者である市民の間をとりもつ行政を巻き込んだ社会全体で問題解決に向けて推進していく必要があります。このような意味で、聴講者の方々の関心の深さは我々に改めて勇気を与えてくれました。また「啓蒙・教育」の大切さも認識させられました。社会全体で問題解決にあたるためには、まず多くの人が問題点を正しく認識することが大切です。このことを踏まえて、我々研究者は研究成果を広く公表して社会に還元するとともに、報道関係者も含め、ただ闇雲に不安をあおるのではなく、できるだけ正確な情報を発信していかなければならないという義務があることを再確認することができました。参加された方々にも、今

回学ばれたことを待ち帰るさらには多くの方々に認識を広めていただければと考えております。

今回の市民講座は初めてで慣れないこともあり、いくらか不手際もあったかと思いますが、まずまず成功だったのではないかと自負しております。次回の市民講座は「第2回千葉大学大学院環境生命医学市民講座」と名称を改め、6月17日(日)開催に向けて準備を進めています。詳細は今後ホームページ(<http://ben.chiba-u.ac.jp/>)等を通じてアナウンスしていく予定です。その後も定期的な開催を目指し、一層充実した市民講座となるよう努力していく所存です。同窓会員の皆様からも、臨床面や研究面から、また一般市民としての立場から興味のあるテーマについてご意見をお寄せいただければ幸いです。



クラス会

昭和27卒の私達のクラス会は、入学80名、卒業65名、物故者14名、不祥1名の会だが、1年おくりて卒業した数名も加わり、最近

は東京近郊で宿泊なしの春の会、秋は1泊2泊の旅行の会を行っている。平成12年秋の旅行会を11月4日(土)5日(日)静岡県在住者の幹事役で、年中行事になった第9回大道芸世界大会で賑わう静岡市で開催した。天気予報ではメイン

の五日は雨降りとのことで心配していたが、予報大はずれで両日共好天に恵まれた。

4日は午後六時より、徳川最後の將軍慶喜が將軍職を辞し駿府に移った時代に住んでいた屋敷あとの浮月楼で懇親会。落着いたたたずまいの旧いお座敷の雰囲気なかで



恒例の近況報告。ご夫人同伴10名、シングル10名計30名が、ある人は長くある人は一言と語るなかに、一人一人の日々の生活が浮びあがってくる。インフルエンザワクチンの話をした橋爪壮君には、何人もから色々の質問がでたりでやはり医者

5日は九時ホテルを出発し、バスで県立美術館(日本平の斜面にあり、ロダン館がある)―葵博東静岡会場―とろろ汁の句で知られる丸子の匠宿(たぐみじく)でのとろろの昼食―駿府城跡の公園で大道芸、葵博駿府会場の見物と、全員70才をこえたメンバーの会としては少し強行軍かと思われる旅程でしたが、みなさん元気で帰路につきました。

出席者。夫婦同伴。大濱博利、小沢昭司、小林清房、渋谷実、関口和夫、服部了司、藤田龍五郎、宮川昭平、渡辺勲、矢島愛二。

シングル。天野茂、小川源太郎、勝呂清、黄田(謝)照光、桜井稔、橋爪壮、広田和俊、町沢清太郎、松浦徳久、渡辺武。

(幹事、勝呂清・松浦徳久)(松浦徳久)

白 兎 会

(昭17卒)

平成12年秋のクラス会(白兎会)は、11月19日(日)に東京駅構内の精養軒で開催した。出席者は級友7名と故人の奥様方5名の計12名であったが、正午から約3時間の昼食会で、久しぶりに和気藹藹と非常に楽しい歓談の一時を過ごすことができた。我々は

戦時中の昭和17年9月の繰り上げ卒業で、以来本年で58年目になるが、戦死者11名を含んで既に45名が故人となり、現在は34名(うち数名は音信不通)となっていました。みんな80歳を越え平均83歳位になっており、最近では体調をくずして外出困難になっている者が多い。



紫 会

(昭34卒)

それでもまだ現役で診療に従事している者も数名おり、半数以上は元気で過ごしており、趣味(絵画、短歌、俳句)を生かして老後を楽しんでいる者が多くなっており、又、故人の奥様方が白兎会に出席するのを大変楽しみにしておられるので、春、秋2回のクラス会は当分続けてゆくことにしている。

写真は、前列左から浦部嘉夫君夫人、村上正中君夫人、数馬欣一君夫人、橋爪達男君夫人、木村泰三君夫人、後列左から松永幹、中村泰治、本間哲雄、藤村満寿夫、窪田静夫、大村光、水間正冬。

(水間正冬)

山 紫 会

(昭34卒)

今年の山紫会(昭和34年卒の会)は、平成12年11月11日(土)東京在住の有志が世話人となり、文京区の「旧鳩山邸(通称音羽御殿)」を借り切って天才シェフ若山誠喜君のフランス料理を頂く会という趣向で開かれた。幸い天候にも恵まれた。午後4時ごろから三々五々集まって庭園の散策、五時からカクテル、6時すぎからのディナーは32名という盛会になった。

会は谷嶋俊雄君の司会で、松本博雅君の開会の挨拶、記念撮影、欠席者の近況紹介、るのはな山の近況紹介、

出席者の近況報告と例年通りのプログラムが進行したが、今年は喜ばしいことが2つあった。第一は新しい物語者がでなかったこと、いつもなら記念撮影の次に行われる「物語者の追悼」はなかった。卒業時79名であった山紫会員数は去年に引き続いて71を維持した。もう一つの喜びは今回の会の仕掛け人、多田富雄君が近著「独酌余滴」でこの7月、第48回エッセイストクラブ賞をもらったことである。級友のお祝いに応えて彼は、アフリカの僻地にドゴン族の村を訪ねた時のことを熱心に話した。現代ヨーロッパの芸術に大きな影響を与えたドゴン族。しかしそこはアフリカ。

今回は高橋功君、矢野 柎多君、横山 哲夫君、玉真 俊一君たち神奈川在住の有志が世話人となって開催する。



(館野之男)

今回の出席者

石川 堯夫	植田 伸夫
遠藤 幸男	兼重 忠司
神田 芳郎	坂田 早苗
塩川 喜之	清水 精子
鈴木 博孝	鈴木 高彦
館野 之男	高橋 功
多田 富雄	津金澤賢雄
永井 順	野口 徹男
原 久弥	羽田 忠
原澤寿三男	飯田 静夫
飯田 暢子	藤田 昌宏
松原 保	松本 博雄
矢崎 光保	谷嶋 俊雄
矢野 柎多	吉井 功
横山 哲夫	山本 成元
多田夫人	野口夫人

(敬称略)

各地のるのな会

だより

群馬のるのな会便り

るのな会群馬県支部の総会を平成12年11月25日、前橋市内マリーキュリホテルで開催した。当日は群馬県医学会総会と日程が重なり、出席者は十六名と例年よりやや少なかった。

まず、沖真澄(昭22)会長の挨拶と会務報告があり、現会員62名で昨年度と変わらないこと、るのな同窓会総会に出席され、その事業計画についての説明があった、また栃木県るのな会と交流の場を持ちたい旨の

お話があった。山口峰久(昭25)から会計報告があり承認された。

続いて、長澤仁一新るのな会会長をお迎えし「新世紀を迎えてるのな会の展望」と題して御講演をいただいた。るのな同窓会会員同志の病・病連携、病・診連携、診・診連携を強力に活用し、お互いに協力し、助け合って行く必要性を熱く語って下さった。また、支部の意見も聞きたいとのことでしたので、出席者ひとり独りが自己紹介と病・診・診・診連携の現況等について発言した。

記念撮影に次いで、懇親会に移り、恒例となりましたが体調を崩されて出席できない長老の北村英吾(昭12)星野久次(昭13)北川道安(昭15)鈴木不二夫(昭15)橋本五郎(昭18)の諸先生に激励の言葉を色紙に書いて御見舞した。会は終始、和やかな雰囲気のうち、にすすみ、



千葉大学医学部 昭和のるのな会
新世紀を迎えてるのな会の展望

20世紀最後の会を宝生流の名手平形義人(昭19)先生が「猩猩」を謡且つよき振りにて舞い納められ、来年の再会を約束して散会しました。

(出席者) 平形義人(昭19) 糸井猛彦(昭22) 沖真澄(昭22) 黒住一昌(昭24) 船曳甫(昭25) 鹿山徳男(昭29) 根本幸一(昭29) 根本幸一夫人、西村忠雄(昭32) 中田益允(昭35) 黒岩璋光(昭37) 本島悌司(昭45) 竹内英世(昭46) 小林道生(昭48) 小林けい子(昭50)

(西村忠雄)

北陸のなな会

今年2月23日に富山市内

において北陸のなな会同窓会を開きました。このところ出席者は10名以下の事が多かったのですが、今回は11名となりました。

諸般の事情により昨年開けなかつたためちよ



附属病院 ニュース

病院長

伊藤晴夫(昭39)

医学部附属病院の主な出来事
(H12・11月～H13・3月)
平成12年11月13日～17日
ティアニー教授研修教育プログラム

卒後・生涯医学臨床研修部の田邊政裕教授の企画により、カリフォルニア大学サンフランシスコ校のLawrence M. Tierney, Jr. 教授を招聘し、講義とケーススタディからなる臨床医学教育プログラムを実施した。内科系の5つの診療科が協力して専門分野別に教育指導がおこなわれた。さらに、「アメリカにおける総合内科の役割」と題する講演が行われた。

平成12年11月30日 人形劇鑑賞会

佐倉市立図書館「おはなしキャラバン」のメンバーが子供達のために、昨年に引き続き、人形劇を熱演された。大勢の子供が楽しい一時をすごした。

平成12年12月22日 第9回
おはなし音楽部コンサート

恒例となった、おはなし音楽部(医学部・看護学部学生)によるコンサートが開催された。演奏のレベルは回を重ねるごとに上達し、

患者さん約250人が楽しい一時を過ごした。

平成13年1月12日 関東・甲信越地区国立大学病院看護部長会議

今年度第3回の会議を本院が当番で開催した。医療事故防止対策、情報開示への対応等について討議した。

平成13年1月16日～17日 助産婦学校入学試験

医学部附属三学校が平成14年3月で廃校となることから、最後の入学試験となった。

平成13年1月17日 第2回
有識者懇談会

この会は広く学外の有識者から自由な意見を聴取し、本院の改革と発展に資することを目的に、病院長の諮問機関として設置された。

今回は医療事故防止に関することを主題としたが、医療従事者では気づかないような良い意見がだされた。

平成13年度 医学部入学者

【宮城】 泉 史隆

【福島】 木嶋由理子

【茨城】 田上 裕子

【栃木】 鈴木 悟士
李 基成

今後の参考としたい。

平成13年1月23日 ちば興銀コスモコンサート

第2回目となるちば興銀コスモコンサートが開催された。千葉興業銀行の地域貢献事業が後援しているピアノ・フルート奏者・声楽家・弦楽四重奏団によるコンサートであり、その

モットーは「子ども達へ音楽の贈り物」とのことである。会場にあふれる程の患者さんが楽しい一夜を過ごした。

平成13年3月6日 ヒュギエイアの庭記念碑除幕式

ギリシャ神話に登場する健康の女神にちなみ命名された庭に千葉大学医学部附属病院臨床医学研究助成会から記念碑などが寄贈された。助成会の緒方会長、飯

豊副会長をお招きして除幕式を行った。

平成13年3月8日 附属三学校卒業式

看護学校42人、放射線技師学校22人、助産婦学校12人が目出度く卒業した。

平成13年度 大学院医学薬学府入学者

杉山淳比古	山川 貴菜	寺西 裕 田 啓樹
山形美絵子	渡辺 悠人	富田 啓介 豊住 武司
【千葉】 石橋 亮一		中山千恵美 西野 仁恵
岡野 淳	小沢さやか	林 伸宇 林 由布子
鎌田 稔子	坂口 彬子	樋口誠一郎 牧角 祥美
佐々木俊秀	砂原 聡	向井 宏樹 山下賢之介
高梨 葉子	田久保匡哉	【神奈川】 石井南穂子
徳武 翔子	中込 敦士	今泉あすか 鎌田 雄
中村 俊介	長澤 耕男	五島 悠介 佐藤 靖祥
西川 里佳	細川 淳一	清水 大輔 清水 智樹
枘田 大生	松井 拓也	新開 英子 鈴木 広和
宮崎ももこ	宮本 悠希	手島ひとみ 友成 暁子
武藤 剛	毛利 文	中野 輝基
【東京】 航 吉富 晋作		【新潟】 相澤 悠太
阿部真一郎	荒木 信之	青木 智広
幾島 京	井口恵里子	【静岡】 石垣 瑞彦
伊原 史英	上田 淳彦	磯部 優理 沖元謙一郎
内田 梨沙	梅舟 仰胤	【広島】 山縣 麻衣
大和多優里	荻原 唯子	【徳島】 大熊 雄介
折登 建統	金塚 彩	【香川】 山崎 泰史
岸 幹夫	小西 孝宜	【鹿児島】 入佐 千晴
小林 沙織	小山 京子	【沖縄】 前里 琴美
近藤 麻伊 齋藤 真		スリランカ・シンデヘ・マドラン (マレーシア)
鈴木 謙介 陳 贊赫		

【細胞生物学(解剖学第二)】

中川壯一、戸高恵美子、岩瀬裕美子、佐藤浩一、松野義晴、小野祐新「環境変異学(生化学第二)」 翟玲、謝琪「分子細胞薬理学(薬理学)」 齊藤智亮「病態病理学(病理学第二)」 石黒洋、宇野野「病原分子学(微生物学第二)」 田頭素行

【感染機構学(寄生虫学)】

直井幸二、姜炫圭、朴蓮荀「環境衛生学(衛生学)」 小川健、原田秀人「地域医療学(公衆衛生学)」 平野好絵、笠松淳也、黒野健司

【病態生理学(内科学第一)】

木村敬太、行澤齊悟、中村和貴、多田素久、山田博之、福田吉宏、蓼沼寛、小林照

宗、田中政道、栗原智子、相正人、前田幸輝「循環病態学(内科学第三)」徐基源、大塚正史、栗原勲、豊田智彦、三枝紀子、佐野雅則、進藤哲、寺本清美、名嘉山恵子、磯山邦彦、宮内秀行「呼吸器病態学(内科学肺研)」和田曉彦、永川博康、松尾直樹、西脇徹、小林研、石川哲、浅香佳子、松尾祐志、黒田文伸「精神機能病態学(精神医学)」小澤公良、岡村斉恵、佐藤康一、白石哲也「小児病態学(小児科学)」鈴木修一、兒子由紀子、落合秀匡「病態検査学(臨床検査医学)」曾川一幸、大橋建也「消化器病態学(外科学第二)」松原克彦、当間雄之、坂間淳孝、平山信男、西森孝典、谷澤豊「呼吸器機能学(外科学肺研)」千代雅子、石川亜紀、黄英哲「運動機能学(整形外科)」川口佳邦、渡辺淳也、白井周史、久光淳士郎、鎌田尊人「頭頸部機能学(耳鼻咽喉科学)」下岡恭子「後腹膜臓器機能学(泌尿器科学)」巢山貴仁、坂本信一、藤村正亮、松本精宏、深沢賢、佐々木哲郎、吉田一樹「口腔機能学(歯科口腔外科学)」笠松厚志、中村恵、濱本哲章、本澤慶憲、小池博文、遠藤洋右、水町裕義、森谷哲浩

「発達機能学(小児外科学)」佐藤嘉治、照井慶太「形態修復学(形成外科学)」中島透「臓器不全病態学(救急医学)」新田正和、森英雄「分化制御学(遺伝生物学)」EGGI ARGUM「発生生物学(発生生物学)」中村洋子「分子腫瘍病理学(病理学第二)」小豆畑康児、河野美紀、庄田英明「細胞治療学(内科学第二)」宮澤さおり、瀬戸洋平、荻野淳、小林一貴、金子堅太郎、日暮真由美、中川倫夫、高取宏昌、藤本昌紀、鐘野勝洋「器官病態学(外科学第一)」押田恵子、小杉千弘、福田啓之、牧野裕庸、高屋敷吏、清水公雄、小島一浩、高見洋司、土田大介、佐藤拓道、三階貴史、佐々木健秀「生殖機能学(産科婦人科学)」海野洋一、平敷好一郎「基質代謝学(皮膚科学)」三重野英樹、村田薫、藤田伸弘「遺伝子制御学(分子遺伝学)」宮本憲一「認知行動生理学(生理学第二)」笠置泰史「視覚病態学(眼科学)」谷合厚、平澤剛「神経機能統御学(脳神経外科学)」枝美絵子「神経機能病態学(神経内科学)」末永忠広、宋家瑩、宗像紳、児山遊、根本有子

卒業生進路

千葉大(寄生虫) 直井幸二
(内科) 沖津恒一郎(二内科) 岩田有史、門平忠之、高橋真理、田中宏明(三内科) 上田和孝、後藤基泰、鳴海浩也、平野智久、芳生旭志、山岡智樹、山崎道子(放射線科) 菅根衛(一外科) 酒井望、古川健(二外科) 成島一夫、吉見浩(整形外科) 柿崎潤、國司俊一、中村順一(産婦人科) 小林恵美里、成智美恵(眼科) 阿部秀樹、大竹邦之、杉山正和、太和田昌枝、畑奈津代、平松彩子、渡辺賢(皮膚科) 宮川健彦(泌尿器科) 加藤智規、松野大輔(小児科) 阿部克昭、本間順(精神科) 角田良太、林由紀子(麻酔科) 八代英子(脳神経外科) 水流京子、長谷川祐三、藤川厚、堀口健太郎(神経内科) 早川省、和田猛(形成外科) 西岡桜、深谷佳孝(呼吸器外科) 鈴木秀海(呼吸器内科) 小西建治、重田文子、杉山玲、中村純、丸岡美貴、安田直史(救急部集中治療部) 大島拓、大谷俊介
東京大(内科) 松本ルミネ(小児科) 平野孝和(形成外科) 川久保徹郎
九州大(一外科) 甲斐昌也

人事異動

慶応大(内科) 下島和弥、中村美穂(外科) 神谷一徳(精神神経科) 竹内啓善、長沢崇
東京女子医大(心研外科) 杉本晃一
国立東京医療センター「志賀隆
国立国際医療センター」松田寿久
国立東京災害医療センター「渡三佳
都立松沢」青島薫、川田深志
都立大久保」李泓
「船橋市立医療センター」市川壯一郎
「国保旭中央」櫻井隆之
「東葛病院」原田麗子
「横浜南共済」佐藤晶子
「武蔵野赤十字」谷口俊文、山田浩司
「飯塚病院」大野博司
千葉大学
教授就任
臓器制御外科学
宮崎 勝(昭50)
(外科学第一講師より)
免疫細胞医学
中山 俊憲(山口大昭59)
(免疫発生学助教授より)
循環病態医学
小室 一成(東大昭57)
(内科学第三助教授より)
分子統合生理学

桑木 共之(東大理昭56)
(生理学第二講師より)
臨床遺伝子応用医学
武城 英明(昭58)
(内科学第二講師より)
教育学部養護教育講座
杉田 克生(昭54)
(臨床医科学・看護学助教授より)
助教昇任
薬理学
佐藤 俊明(大分医大昭62)
(大分医科大助手より)
細胞分子医学
三木 隆司(昭63)
(分子機能制御学助手より)
講師昇任
第二内科
森 聖二郎(昭58)
(同助手より)
整形外科学
村上 正純(昭54)
(同助手より)
精神医学
岡田 眞一(昭59)
(同助手より)
小児病態学
下条 直樹(昭54)
自律機能生理学
下山 恵美(昭59)
(生理学第二助手より)
病態病理学
岸本 充(北大昭63)
(病理学第二助手より)
他大学
教授就任
奈良県立医科大学
第二内科

木村 弘(金沢昭53)
(千葉大肺研第二助教授より)
信州大学
薬剤部
大森 栄(千葉大昭55)
(千葉大薬剤部助教授より)
長崎大学
医療情報部
本多 正幸(千葉大理昭51)
(千葉大医療情報部助教授より)
東京女子医科大学
第二病理学
小田 秀明(昭57)
(東京大大学院助教授より)
耳鼻咽喉科学
吉原 俊雄(昭53)

(同助教授より)
帝京大学市原病院
泌尿器科
正井 基之(昭57)
(同助教授より)
防衛医科大学校
産婦人科学講座
菊池義公(昭41)
(同助教授より)
病院長
東京女子医科大学附属病院
長
林 直諒(昭38)
(東京女子医大附属消化器病センター長より)
(11へ続く)

おくやみ

楠 正夫(日本大昭10)
久富 良次(昭12)
安達 元郎(昭14)
志村 巖(日本大昭14)
藤倉 静男(日本大昭14)
萩原 敏秀(昭15)
田尻 哲夫(昭17)
長尾謙五郎(昭17)
福田 幸雄(昭18)
吉沢 周(昭18)
田辺 次郎(昭19)
草野 薫(昭20)
黒須 吉夫(昭23)
長井 和行(昭24)
篠原 治人(昭25)
太田重二郎(昭25)
宇多 康浩(前橋医昭25)
佐久間 魁(昭26)
青島定次郎(昭26)
田中 政憲(昭26)
岡野 和夫(昭27)
楠方 文世(熊本医大昭27)
新井田俊典(東京大昭27)
鈴木 治(昭28)
飯島 嘉之(昭30)
川口新一郎(昭30)
窪田 俊夫(昭32)
小林 茂樹(信州大昭34)
工藤 純孝(昭35)
鈴木 弘(昭44)
服部 義博(昭48)
山下 道隆(昭49)
永瀬 佳子(昭50)

千葉県職員異動

医療技術大学

高橋 淳一(昭41) 校長

(千葉労災整外部長より)

保健所長

内田佐太臣(東邦 昭37)

木更津(船橋より)

がんセンター

渡辺 一男(昭41) 診療局

長(診療部長より)

渡邊 敏(北大 昭50)

消化器外科部長(主任医長

林崎 勝武(昭44) 頭頸科

部長(千葉労災より)

青柳光生(昭49) 主任医長

(国立千葉より)

石井 猛(昭56) 整外主

任医長(医長より)

高野 英行(昭61) 画像診

断部長(千大より)

ことも病院

長 雄一(昭55) 泌尿主

任医長(医長より)

佐藤 浩一(群馬 昭56)

小児主任医長(医長より)

塚本 和秀(旭川 平元)

眼科医長(国立国府台より)

西須 孝(平元) 整外医

長(千大より)

佐藤 一樹(平4) 小児医

長(千葉市立海浜より)

循環器病センター

石川 隆尉(昭56) 内科主

任医長(医長より)

哇元 亮作(昭58) 内科部

長(医長より)

本間 甲一(昭59) 神経内

科部長(医長より)

板橋 孝(昭57) 整外医長

(国立千葉より)

救急医療センター

岡田 吉弘(平2) 外科医

長(千大より)

砂澤 徹(新潟 平3)

心外医長(成田赤十字より)

松野 公紀(平3) 内科医

長(千大より)

佐原病院

伊勢 博(昭51) 診療部

長(脳外部長)

五反田 純(金沢 昭52)

麻酔科部長(国立がんセン

ター)

佐久間洋一(弘前 昭60)

外科部長(石橋病院より)

景山 雄介(昭58) 脳外部

長(病理検査部長より)

町田 利生(平5) 脳外医

長(千大より)

東金病院

大鳥 精司(平6) 整外医

長(千大より)

健康福祉部技監兼身体障害

者福祉事業団派遣

北原 宏(昭43) (千大

付属病院副院長より)

健康福祉部技監兼日赤千葉

県支部派遣

島田 文之(昭37) (がん

センター医療局長より)

千葉県職員より退職

村田 忠雄(昭36) 健康福

祉部技監

小倉 敬一(昭36) 健康福

祉部技監

堀部 治男(日大昭35) 木

更津保健所長

布施 吉弘(昭37) 医療技

術大学校長

油井 信春(昭37) がんセ

ンター核医学診療部長

鈴木 晴彦(昭48) がんセ

ンター頭頸科部長

瀬崎登志彰(岩手昭37) 循

環器病センター麻酔科部長

石井 豊信(昭43) 東金病

院小児科部長

茂木 健司(昭63) 救急医

療センター外科医長

篠原裕治(山形昭58) こど

も病院整外医長

小野 智敏(昭60) 循環器

病センター整外医長

千葉県医師会

会長 前田 昌利・昭32

千葉県医師会

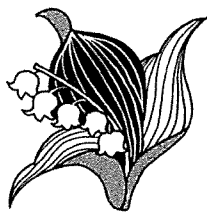
監事 三枝 一雄・昭32

茂原市長生郡医師会

会 長 前田 昌利・昭32

千葉県医師会

監事 三枝 一雄・昭32



千葉大学大学院医学研究院組織表

13. 4. 1 現在

教室名	コード	教授	旧講座等名	教室名	コード	教授	旧講座等名
環境影響生化学	A 1	鈴木 信夫	生化学第二	生殖機能病態学	G 4	関 谷 宗 英	産科婦人科学
環境労働衛生学	A 2	能 川 浩 二	衛生学	遺伝子制御学	H 1	齊 藤 隆 隆	遺伝子制御学
環境生命医学	A 3	森 千 里	解剖学第一	分化制御学	H 2	徳 久 剛 史	分化制御学
公衆衛生学	A 4	安 達 元 明	公衆衛生学	免疫発生学	H 3	谷 口 山 俊 克 憲	免疫発生学
法医学	A 5	木 内 政 寛	法医学	小児病態学	H 4	河 野 陽 一	小児科学
麻酔学	B 1	西 野 卓	麻酔学	整形外科学	J 1	守 屋 秀 繁	整形外科学
加齢呼吸器病態制御学	B 2	栗 山 喬 之	肺研・第二	耳鼻咽喉科学	J 2	今 野 昭 義	耳鼻咽喉科学
基礎病理学	B 3	大和田 英 美	肺研・病理	救急集中治療医学	J 3	平 澤 博 之	救急医学
神経生物学	C 1	千 葉 胤 道	解剖学第三	形成外科学	J 4	一 瀬 正 治	形成外科
神経情報統合生理学	C 2	中 島 祥 夫	生理学第一	腫瘍内科学	K 1	税 所 宏 光	内科学第一
自律機能生理学	C 3	福 田 康 一 郎 之	生理学第二	精神医学	K 2	伊 豫 雅 臣	精神医学
記憶統御学		■松 本 元	(客員)	放射線腫瘍学	L 1	伊 東 久 夫	放射線医学
視覚病態学	D 1	安 達 恵 美 子	眼科学	肝胆脾重粒子線治療学	L 2		内科学第一
神経統御学	D 2	山 浦 晶	脳神経外科学	頭頸部腫瘍学	L 3		耳鼻咽喉科学
神経病態学	D 3	服 部 孝 道	神経内科学	眼科重粒子線治療学	L 4		眼科学
遺伝子生化学	E 1	瀧 口 正 樹	生化学第一	泌尿器科腫瘍重粒子線治療学	L 5		泌尿器科学
分子ウイルス学	E 2	白 澤 浩	微生物学第一	神経疾患重粒子線治療学	L 6		脳神経外科学
病態病理学	E 3	石 倉 浩 浩	病理学第二	基礎病態学	L 7		肺研・病理
腫瘍病理学	E 4	張ヶ谷 健 一	病理学第一	婦人科腫瘍重粒子線治療学	L 8		産科婦人科学
遺伝子機能病態学	E 5	伊 藤 晴 夫	泌尿器科学			■辻 井 博 彦 夫	(客員)
小児外科学	E 6	大 沼 直 躬	小児外科学			■池 平 博 彦 夫	
病原分子制御学	F 1	野 田 公 俊	微生物学第二	胸部外科学	M 1	藤 澤 武 彦	肺研・第一
薬理学	F 2	中 谷 晴 昭	薬理学	免疫細胞医学	M 2	中 山 俊 憲	免疫発生学
感染生体防御学	F 3	矢 野 明 彦	寄生虫学	細胞分子医学	M 3	清 野 進	分子機能制御
分子生体制御学	F 4	木 村 定 雄	分子生体機構学	循環病態医科学	M 4	小 室 一 成	内科学第三
細胞治療学	F 5	齋 藤 康 明	内科学第二	分子統合生理学	M 5	桑 木 共 之	生理学第二
臓器制御外科学	F 6	宮 崎 勝	外科学第一	臨床遺伝子応用医学	M 6	武 城 英 明	内科学第二
基質代謝治療学	F 7	新 海 法	皮膚科学	分子腫瘍学	M 7		泌尿器科学
分子病態解析学	F 8	野 村 文 夫	臨床検査医学	臨床分子生物学	M 8	丹 沢 秀 樹	歯科口腔外科学
形態形成学	G 1	湯 浅 茂 樹	解剖学第二	先端応用外科学	M 9	落 合 武 徳	外科学第二
発生生物学	G 2	古 関 明 彦	発生生物学	脳機能学	M10		放射線医学
動物病態学	G 3		動物実験施設				動物実験施設

※は兼務(研究院長発令) ■は客員

<http://www.m.chiba-u.ac.jp/research/resea.html>

平成12年度
第3回常任理事会議事録

日時 平成13年2月28日
(水)16時～17時45分
場所 千葉スカイウイン
ドウス東大紅(セ
ンシティタワー22
階)

の把握について議論され
た。
二、ゐのはな同窓会賞の選
考経過について、矢野理
事より報告があった。功
労賞の推薦要請がなされ
た。

出席者 大藤正雄、大沼直
躬、大浜博利、沖真澄、
小幡裕、笠川猛、木内政
寛、香田真一、税所宏光、
三枝一雄、阪信、佐藤甫
夫、鈴木信夫、関根博、
滝口正樹、長澤仁一、萩
原彌四郎、道永麻里、村
瀬靖、茂又眞祐、渡邊武
議 題

三、同窓会報の発行予定・
編集方針について、鈴木
理事から報告があった。
官公庁在籍の卒業生の人
事について情報を歓迎す
る旨説明があった。

一、昇任者の四金会招待に
ついて
長澤会長・大沼理事より
説明があり承認された。
また、渡邊副会長より、
次回から研究助成交付者
を招待する旨、提案があ
り承認された。

四、ゐのはな同窓会ネット
ワーク検討会について、
鈴木理事から報告があっ
た。同窓会ホームページ
の開設、会員と大学病院
医局とのQ&A交流の試
行について説明がなされ
た。

二、平成13年度行事予定に
ついて
滝口理事より平成12年
度との異同について説明
があり、承認された。各
賞の募集時期等について
今後検討することとした。

五、千葉大学同窓会(金字)
の準備委員会の設立につ
いて、滝口理事から報告
があった。同窓会設立の
趣旨が卒業生間の親睦等
を通じた魅力ある大学作
りにあるとの説明が、磯
野学長よりあった旨報告
された。

報告事項
一、平成12年度中間決算に
ついて、税所理事より報
告があった。収入予測等

六、埼玉県支部同窓会報の
創刊について阪理事から
報告があった。

四金会
引き続き同所で四金会が
行なわれた。大沼理事の司
会で、長澤会長の御挨拶に
続き、井出名譽会長の長年

の御貢献に対し、記念品の
贈呈が行われた。茂又理事
の乾杯御発声、阪理事の御
挨拶に始まり、和やかに歓
談の時を過ごした。新任、
昇任教官を代表して石井源
一郎、武城英明、新井公人、
桑原聡の各講師から御挨拶
を頂いた。多くの会員の参
加を得て、有意義な懇親会
であった。

平成13年度
第1回常任理事会議事録

日時 平成13年4月25日
(水)16時～18時
場所 千葉スカイウイン
ドウス出雲の間
(センシティタワー
23階)

出席者 大藤正雄、大浜博
利、沖真澄、笠川
猛、木内政寛、国
井光智、香田真一、
近藤洋一郎、阪信、
佐藤甫夫、白澤浩、
鈴木信夫、関根博、
滝口正樹、長澤仁
一、萩原彌四郎、
道永麻里、武者広
隆、村瀬靖、茂又
眞祐、矢野明彦、
渡辺武

三、平成12年度決算案につ
いて
木内理事より、決算内
容についての説明と、笠
川、国井会計監事より、
監査報告があり、決算案
が承認され、総会に提案
することになった。今後
会費納入率向上の具体策
を検討することとした。

四、平成13年度事業計画に
ついて
滝口理事より、説明が
あり、承認され、総会に
提案することになった。
今後、支部活性化支援の
具体策を検討することと
した。

五、平成13年度予算案につ
いて
木内理事より、説明が
あり、承認され、総会に
提案することになった。

六、ゐのはな同窓会賞選考
結果について
矢野理事より、選考委
員会による選考経過と、
功労賞(3名)、学術賞
(9名)の各候補者の推

七、総会議案について
渡辺理事、鈴木理事よ
り、平成13年度総会の日
程、議案について説明が
あり、承認された。

八、同窓会会員名簿発行に
ついて
滝口理事より、2002年発
行予定の名簿について説
明があり、承認された。
九、大藤正雄参与より
貫洞一夫参与のゐのは
な同窓会に対するご貢献
に対し、記念品を贈呈し
てご功績を讃えることが
提案され、承認された。

薦理由の説明があり、承
認された。
七、総会議案について
渡辺理事、鈴木理事よ
り、平成13年度総会の日
程、議案について説明が
あり、承認された。

ゐのはな同窓会
学外研究助成募集要項

撈、近藤副会長の乾杯ご
発声に始まり、和やかに
歓談の時を過ごした。御
招待の先生方からもご挨拶

撈を頂き、多くの会員の
参加を得て、有意義な懇
親会であった。

第3回(2001年度)ゐのは
な同窓会学外研究助成の応募を
左記により受け付けま
す。なお研究費の交付を受
けた者は3年以内に同窓会
総会(毎年6月)にて研究
成果の発表を行っていただ
きます。

1、助成対象 本会会員
(甲および乙)で、大学
およびそれに準ずる研究
所以外の施設に勤務して
いる医師および歯科医師
が、個人またはグループ
の代表となつて行う研究
2、助成金 本年度の助成
総額は350万円とし、1件
につき50～100万円を予定
しています。
3、応募方法 6月1日か
ら8月31日までに申請し
て下さい。申請用紙は同
窓会事務室宛に請求して
下さい。
4、助成研究の決定 選考
委員会および常任理事会
の議を経て、会長が行い
ます。
審査結果は2001年11月末
までに各申請者に通知す
ると共に、ゐのはな同窓
会報に掲載する。

編集後記

大学では、大学院への組
織換えに伴い、機構に大き
な変化がありました。もっ
とも、正面玄関に掲げられ
た「千葉大学医学部」の看板
は今の所そのままです。
前ページに旧組織との対
応表を掲載しました。登録
上は部門名、講座名がある
のですが、日常的には「千
葉大学大学院医学研究科
」で呼ぶことしております。コー
ドは、名が体を表し難くなっ
た呼称に事務的に対応する
ための工夫です。
(白澤 浩 昭57)